

位置と環境

遺跡は市の中心部の東南東約3km離れた、市山川によって形成された標高約200mの右岸の河岸段丘の先端部に立地する。

また、平田遺跡の西方約200mの位置には、地下式横穴墓及び地下式板石積石室墓が検出された瀬ノ上遺跡が所在する。

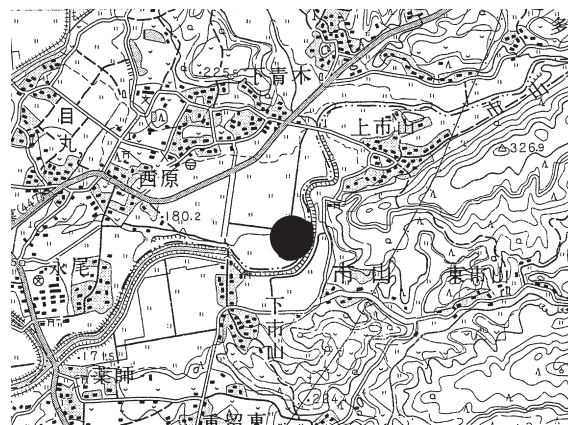
調査の経緯

県営農業基盤整備事業（青木地区）に伴って、大口市教育委員かが調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和60年に本調査を実施した。

遺構と遺物

発掘調査の結果、台地縁辺部に沿って幅約60m長さ約140mの範囲に地下式板石積石室墓が140基検出された（写真1）。

地下式板石積石室墓は、南九州独自の古墳時代の埋葬の一形式で、掘り窪めた地下の床面に扁平な板石を囲って石室を作り、遺体や副葬品を納め、その



第1図 平田遺跡の位置

上に同様な板石で持ち送り式に覆うものである。

分布は、川内川流域を主とし、出水、人吉盆地、えびの市等に限られている。

検出された地下式板石積石室墓は、石室の平面形から方形型36基、中間型の多角形8基、楕円型17基、円形型78基、不明1基で、遺跡内での分布は、北東のやや小高い位置に方形型、南西の低い位置に円形型、その中間の位置には多角形型、楕円形型と続き、円形型繋がっていた（第2図）。

検出された地下式板石積石室墓の葺石は後世の耕



写真1 平田遺跡全景

のためにほとんど除去されていたが、石室は原型を留めており、鉄鍬の副葬品も検出された。

遺物は葺石の間や石室の外側に供献したもの他に、石室内に副葬品として置かれた鉄鍬であった。鉄鍬の形態から圭頭広根斧箭式鉄鍬、広根柳葉式鉄鍬、有段広根柳葉式鉄鍬、腸扶広根柳葉式鉄鍬、無茎の広鋒腸扶三角式鉄鍬等である（第2図）。

これらの鉄鍬の形態から時期は、概ね6世紀を中心としたその前後と考えられる。

特徴

これまで、石室の平面形や副葬品等から地下式板石積石室墓の編年が行なわれてきたが、複数の平面形を有するものが同一遺跡から多量に検出される良好遺跡が少なかった。

平田遺跡では、140基という多量の石室に加え形態が異なる石室が整然と検出されたことから、その変遷を考察する良好な遺跡である。

板石の使用法、出土品等を総合的に考察すると、平田遺跡では方形型から多角形型、円形型に移行することを確認できた。

また、石室に全く切り合いがないことから、地表面になんらかの標識があったことも推察される。

なお、140基のうち排水路等やむを得ない区域内の19基のみ記録保存し、残りの121基は関係機関の理解と協力で現地保存された。

資料の所在

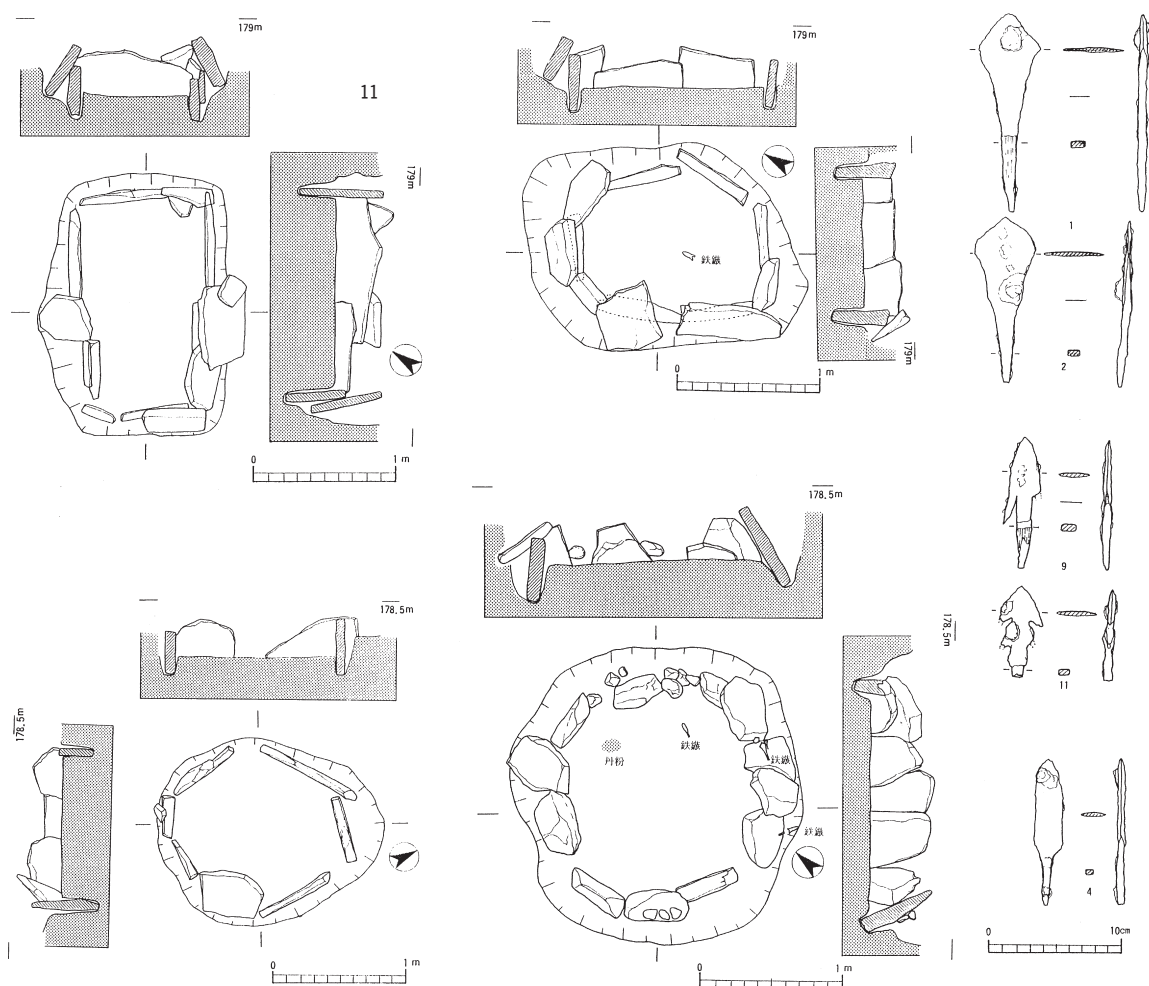
出土遺物は、大口市教育委員会の資料館に保存・展示されている。

参考文献

寺師見國1959「鹿児島県大口市大住・焼山石室古墳群」『鹿児島県文化財調査報告書』（6）

大口市教育委員会1986「瀬ノ上遺跡・平田遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』5

（戸崎勝洋）



第2図 遺構及び遺物